

パンタナール通信

南北米福地開発協会

会報

2008年5月1日

56号

第8回国際協力青年ボランティア隊、8月20日、インディヒナの村派遣決定！！



学校を建設したエスペランサ村の植樹と教育資材の提供を中心に活動を展開する予定。

二〇〇八年度の国際協力青年ボランティア隊の活動の具体的な内容を南北米福地開発協会神山会長ならびに飯野事務総長が現地、パラグアイ国、チャコ地方、エスペランサ村を三月に訪れ、アスンシヨンで事務局にいる三石現地受け入れ責任者と協議した結果、今年はディアナ村とエスペランサ村に当協会が二〇〇三、四年に建設した学校を囲む二ームの木の植樹と村の健康維持のため栄養価の高い植物であるモリンガの植林をすることになりました。二ームの木は常緑樹で乾燥地に強く、害虫に侵されない丈夫な木で、木は殺菌力があり、木の小枝で、歯を磨き、虫歯の予防になるだけでなく歯槽膿漏などの予防にも大変効果がある健康にとても貢献する木で村の薬局とインドでは家庭で重宝がられています。

また、木が成長すれば二〇メートルの常緑樹で暑いパラグアイのような所に最適で、木陰をつくり、学校の周りに植えれば、周りの気温を低くし、学校の教室が勉強に最適な環境を整える事ができると期待されます。

モリンガの木は僻地に住む子供たちがとかく必要な栄養が不足しがちになり、病気にかかりやすくなることを防ぐ、体に有用な成分が多く含まれています。カルシウム、亜鉛、アミノ酸が豊富に含まれ、栄養失調の子供に葉の粉を少し入れ、通常の食事に混ぜるだけで、栄養状態が改善されます。モリンガを育てて葉を収穫するのは簡単です。小枝に十数枚の若葉が付いており、木の成長も早く、六ヶ月で四メートルにもなります。（二pに続く）

上澄みのきれいな水を取り出し、太陽のもとに数時間さらしたのち、飲料水として用います。このような単純な方法で出来た水を用すれば水から感染する病気の割合を八十九十五%減少できます。



植えて半年目のモリンガ(レダ)

日本においても平成十七年九月に行われた愛地球博で日本モリンガ協会が「世界の子供たちにきれいな水」をテーマにモリンガの水浄化を紹介してきました。汚濁水にパウダーを入れて水が澄み、きれいになつく植物の威力に一様に驚いておりました。

今年の国際協力青年ボランティア隊の植樹活動がインディヒナの村のためになること

思います。



パラグアイ川の水を直接飲む少女

「途上国の自立支援に

国連が報告『ニームは二〇世紀最大の贈り物』
二〇〇 四〇〇種類の害虫を防ぐ。
歐米では有機農業の切り札!!



ニームの木の植樹(レダ)

モリンガの特徴には栄養が豊富であるばかりでなく、インディヒナの村のような僻地で最も大きな問題となる水の浄化を助けることがあります。現在でもパラグアイ川沿いのインディヒナの村では川の水を直接飲んでおり、そのために衛生上の問題で、特に弱者である子供、老人が病気になることが問題となっています。

都会では水の汚染部分を硫酸アルミニュームで凝固させ、凝固させたものを取り除いています。しかし、インディヒナの村ではそのような方法を取らず、そのままの水を使っているのが現状です。モリンガの種の粉末は天然の浄化用資源として、体に優しい水を提供してくれます。浄化方法は簡単で、モリンガの種から核を取り出し、それを粉にし、川からとった水の中に入れ、数十秒棒でかき混ぜ、三十分ぐらい放置すると泥と汚染物が底の方にたまります。

ニームはセンダン科の常緑樹で和名をインドセンドンと言い、十五m二十mにも成長する高木。花は白く、実は梅の実を少し小さくした程度の大きさ。インド原産で、乾燥にも強く砂漠地帯でも育つ。適地ならば三年目で実や葉を加工し換金できる。ニームは捨てるところがない。種子、ニームオイル（種子を絞った油）、花葉、葉の汁、樹皮、樹皮から採れる樹脂など、それぞれに効能があり、内用、外用を問わず万能薬のように使われてきた。殺虫、防虫をはじめ、葉はお茶や入浴剤に、葉の汁を石鹼に混ぜたりもしている。細い枝は先を削って、抗菌歯ブラシとしてインドでは口に咥えるのがポピュラー。その昔、お釈迦様は弟子達に「ニームで歯を清潔にするように」と戒律で説いていたほど。（新聞 環境農業 平成十五年一月十五付）

国際協力青年ボランティア隊の歩み



2005年 カトルセ・マジョ村



2004年エスペランサ村学校建設

石原圭太郎（青年奉仕隊に参加して）

エスペランサは僕にとって、あまりにも特別な場所となつた。僕の魂の一部を、エスペランサに置いてきたような気がする。今、僕の左腕には工

スペランサで子供から買った腕輪がかかる。この腕輪を見る度に、僕はエスペランサでの時間へと舞い戻る。

エスペランサへ向かい、パラグアイ川を溯る時、わずかな不安を抱いていた。村人達は、自分達のような外から来た人間を受け入れてくれるのだろうか、子供達は素直に心を開いてくれるだろうか、どう。しかし、他のどんな理由でもなく、僕とエスペランサの人々が、家族だからその地へ訪れ、奉仕するのだ、ということを思い、決意し直した。初めて会ったエスペランサの子供達は無条件に可愛かった。透き通るような目でこちらを見つめていた。大人達は少し不思議そうな表情だったが、あいさつをすると笑顔で返してくれた。すぐに打ち解け、彼らと仲良くなることができた。それが素直に嬉しかった。

学校建設の労働奉仕は想像を絶するものだつた。土台となるコンクリートを打つ仕事だったのだが、体が壊れそうになりながら、ほとんど気力で乗り越えた。それを通して、現地の労働者達とより深く交わり、心を通わすことができた。辛い労働奉仕を成し遂げることができたのは、メンバーとのチームワークとそれ故だと思う。日中は四十を越える環境の中で働き続ける彼らの体力と一生懸命さに、心を打たれた。辛い労働奉仕を成し遂げることができたのは、メンバーとのチームワーク

とそれ故だと思う。日中は四十を越える環境の中で働き続ける彼らの体力と一生懸命さに、心を打たれた。

しかし、最も心を熱くさせるのは、子供達である。彼らに少しでも笑顔で接していけば、満面の笑みで応えてくれた。あまりにも純粋で偽りのない彼らの笑顔に、もうノックアウトである。僕達の周りにはいつも子供達が居た。それで、どんなに労働で疲れている時でも、底知れぬ力が湧いてくるのだ。普段ならあの過酷な労働の後には間違いない崩れ落ちると思うのだが、僕は男の子達とサッカーをやつて走り回っていた。縄跳びや折り紙、日本語講座などを通して、子供達と深く深く交わつていった。折り紙の時など、折つて欲しいと懇願して僕を取り囮む彼らのあまりの可愛さに、二本しか無い自分の手に悔しさを覚えた程だ。彼らは僕の弟、妹達だと思う。エスペランサを訪ねる時、村の人々は僕の家族だと頭で思っていた僕は、最後にはいつまでも一緒に居たい、紛れもない本当の家族の関係を感じていた。

エスペランサで過ごす中で、僕は生涯をここでおくつても構わないと真剣に思えた。むしろここに残りたいとも思った。ずっとどこで、労働者達と汗を流し、子供達の笑顔と共に、彼らを見守りながら、美しく雄大な自然に育まれて生きようと思った。どれだけ彼らの心が清く美しかったただろう。為に生きるということを自然体で行っている彼らに、何度も感動した。

エスペランサの人々は、人間は素晴らしいこと、

僕に教えてくれた。（続く）

